

## 「発話の場」の設定と文の種類について<sup>1</sup>

### はじめに

§1 これまで動詞の有する意義の構造について種々考察を進めて来たが、その基礎となったのは、二つの作業仮説であった。一つは品詞の区別一般に関するものであり、他の一つは動詞の意義に関わるものであったが、その概要は『人文』第20集所載の拙論において述べた通りである<sup>2</sup>。結論として言えば、これは動詞の意義を、着目する対象の状態の変化と附加的な条件の集合(他動詞の場合には更に副次的な対象の状態の変化、また準他動詞の場合には行為の成立のために必要な条件としての対象の表示が、それぞれこれに加わる)の組として考えるものである。

ここで準他動詞 *verba quasitransitiva* としたのは、例えば *перейти мост* 「橋を渡る」、*circumire urbem* 「町を迂回する」等の表現における *мост, urbem* のように、それ自身状況の変化の担い手ではないにもかかわらず、動詞の語彙的意義を構成する上で、不可欠な要素と認められる対象の存在を予定する、一群の動詞である<sup>3</sup>。

いま自動詞を *itr.* 他動詞を *tr.* また準他動詞を *qtr.* とするとき、それぞれの意義は次の様な構造を持つと考えられる。

$$V(itr.): [dS_x, K]$$

$$V(tr.): [dS_x, dS_y, K]$$

$$V(qtr.): [dS_x, S_y, K]$$

ここで  $S_x, S_y$  はそれぞれ対象  $x, y$  の状態、 $dS$  は状態の変化、 $K$  は附加的な条件の集合をあらわす。言主はこれらの要素の存在を認識し、これを「様式化」して、ある行為が成立すると認定すると、考えるのである<sup>4</sup>。

### 本論

§2 このような仮説に基づく動詞の意義構造の記述は、これまでの所、動詞に関わる種々の現象を説明するのに有効であったと思われる。しかし考察を進めるにつれて、この仮説の有効性に一定の限界の存在することも、漸く明らかになって来た。この仮説が有効なのは専ら動詞の語彙的意義についてであって、これによってはなお説明できない文法的な現象の存在が明確になったからである。

<sup>1</sup> 『ロシア語ロシア文学研究』第17号 1985年9月 47-59頁。

<sup>2</sup> A Consideration on the Category of Transitivity in Russian, 『人文』第20集(1974), pp. 44-54.

<sup>3</sup> 「準他動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』第8号(1976), pp. 1-12.

<sup>4</sup> 注2、注3の外、Remarks on the Meanings of Russian Verbs, *Japanese Slavic and East European Studies*, No.1, 1980 Aug., pp. 1-14.

このことから、上述の仮説と密接な論理的関連を保持しながら、これら文法的な意義の考察の基礎となる仮説を、新たに設定することが必要になって来る。この小論の趣旨もまた、まさにこの点にある。

§3 ところで上述の仮説において考察された要素は、何れも行為の生起する状況を構成するものであって、一定の行為についての発話がなされる状況とは、必ずしも一致しない。

たとえば *I went to school yesterday.* という発話を考えてみる。この場合、空間的位置を連続的に変化させるところの、*I* によって指示される対象の状態の変化を主たる要素として成立する、*go* という行為を可能ならしめる状況と、*I* によって指示される同一の対象が、*I* 以外のある対象に対して上述の発話を行う状況とは、当然のことながら明らかに異っている。たとえ *went* を *am going* に変えたとしても、事情は毫も変るところがない。この場合二つの状況が互いに重なり合うにしても、両者はやはり論理的に異なるものとせねばならない。

*I* によって示される人称の別、あるいは *went* によって示される時制などの文法範疇乃至文法的意義は、主としてこの発話のなされる状況との関連において定義されるべき性質のものであるが、行為の生起する状況は主として動詞の語彙的意義に関係している。両者は互いに滲透し合っているが、なお明確に区別されることを要する。ここでは行為の生起する状況を仮に「行為の場」と呼び、発話のなされる状況を「発話の場」と称することにする。

§4 「発話の場」については、これが「話し手」、「聞き手」及び話の内容をなす「命題」、並びに「附加的条件の集合」から成ると仮定し、これらをひとまず次のように表示することにする。

$$[\lambda(A, B, P), M] \quad \textcircled{1}$$

ここで *A* は「話し手」の集合、*B* は「聞き手」の集合を表わしている。*P* は「命題」、*M* は「附加的条件の集合」である。 $\lambda$  は *A* と *B* の間に命題 *P* を内容とする、言語による伝達が行われることを示している。話し手は通常単数であるが、複数として現われることもあるので、集合と考えることによって一般性を持たせている。ところで従来 の仮定によって決定されるのは *P* の内部構造であるから、 $\textcircled{1}$  の仮定が、従来のもものと異なるレベルに属するものであることは、明らかであろう。

§5 *P* の内部構造は、主動詞を *V* とするとき、自動詞ならば *V(X)*、準他動詞並びに他動詞ならば *V(X, Y)*、また不完全自動詞ならば *V(X, Q)*、不完全準他動詞ならびに不完全他動詞ならば *V(X, Y, Q)* のような形で与えられる<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第23集(1977), pp. 73-86. 及び「造格の機能といわ

もしここで「 $X$  は  $A$  に含まれる」( $X \subseteq A$ ) という条件が与えられれば、 $V$  は一人称、「 $X$  は  $B$  に含まれる」( $X \subseteq B$ ) であれば二人称、またもし「 $X$  は  $A, B$  の何れにも含まれない」( $X \not\subseteq A \cup B$ ) ならば三人称になると考えられる。これは  $A, B$  という辞項の存在から明らかなように、「発話の場」においてはじめて定義が可能となる概念である。これは恐らくは  $M$  に属する附加的条件であると考えられる。

この場合 ① に仮定した発話の場の構造から、一人称、特に単数、が特殊な位置を占めるであろうことは、容易に首肯できるところである。

§6 印欧語は一般にこれを  $V$  における形式として表示するが、日本語のように、これを形式的に表現しない言語もある。更に言語によっては  $V(X, Y)$  の要素  $Y$  と  $A$  又は  $B$  との関係を、形式的に表示する場合もある。いわゆる対象活用 objective conjugation である。

これについて論ずることは筆者の能くするところではないが、例えばバスクの言語では、目的語の人称に従って動詞の接辞を異にするという。たとえば ukan 「持つ」は ha-u-t 「お前を・持つ・私は」、d-u-t 「彼を・持つ・私は」、na-u-k 「私を・持つ・お前は」、ga-it-u-( $\emptyset$ ) 「私・複数を・持つ・彼は」のような場合である<sup>6</sup>。スワヒリ語もこれとよく似た体系を持っている。印欧語においても起源的に対象活用が存在していたことを疑う、クレッチマーのような学者がいる。

またマジャー語のように、目的語が特定されるか否かによって、動詞が異った変化を行う言語もある。たとえば、

Szeretek jó könyveket olvasni.

「私はよい書物を読むのが好きだ。」

(一般変化 → 不定変化)

Szeretem olvasni a jó könyveket.

「私はそれらのよい書物を読むのが好きだ。」

(特定 → 定変化)<sup>7</sup>

これも  $V(X, Y)$  の  $Y$  にかかわる類別が、動詞に於いて形式的に表現されているという点で、対象活用の特殊なものと考えられる。

§7 ところで人称を前節のように規定したとしても、集合  $A$  及び  $B$  をどのように決定するかは、依然として問題となる。通常話者が「われわれ」という時、「われわれ」なる集団に属し、かつ話者でない人々の存在することが明白だからである。否、「われわれ」とい

ゆる叙述の造格について』『人文』第28集(1982), pp. 91-116.

<sup>6</sup> 下宮忠雄『バスク語入門』大修館書店(1979), p. 123.

<sup>7</sup> Bánhidi-Jókay-Szabó, *Learn Hungarian*, Budapest 1965.

う集団に属する人々が、同時に同一の発話を行うのは、むしろ異例のことに属する。従ってこれらの人々を話し手に含める為には、発話とは別の基準が必要とされよう。

二人称の場合には、聞き手が複数であることは原理的に可能であるから、この種の問題の生ずる余地がないようにも見えるが、仔細に観察すれば、ここにもやはり種々の問題の存することが知られる。今はこれについて立入ることをしないが、何れ稿を改めて論ずる必要がある。

いま、これらの集合を決定する何等かの基準乃至特徴関数が立てられたとする。これらの集合の元は、何れもこの規準に関して同値であるから、これを特定の話し手  $a$  及び  $b$  を代表元とする同値類と考えることを得る。これをそれぞれ  $G(a), G(b)$  のように表わすとすれば、「発話の場」は次のように表示することができる。

$$[\lambda(G(a), G(b), P)), M] \quad \textcircled{2}$$

このようにすれば、一人称の場合、 $X \subseteq G(a)$ 、二人称及び三人称の場合、それぞれ  $X \subseteq G(b)$ 、 $X \subseteq \overline{G(a) \cup G(b)}$  によってあらわされる条件が  $M$  の元として存在することになる。ここでもし  $X \subseteq G(a) = \{a\}$ 、 $X \subseteq G(b) = \{b\}$ 、 $X \subseteq \overline{G(a) \cup G(b)} = \{c\}$  ならば、これはそれぞれの人称の単数を表わすことになる。

§8 このような「発話の場」は、厳密に言えばそれ自身時間の関数であつて、時間によつて変化すると考えられるが、ここではこれを無視する。

いま、聞き手に対して話し手が発話を行う時点を  $t(\lambda)$ 、行為  $V$  の成立する時点を  $t(V)$  とし、差  $\tau = t(\lambda) - t(V)$  を考える。 $t(\lambda)$  と  $t(V)$  とが一致しているとき、即ち  $t = 0$  のとき、 $V$  に「現在」という文法的意義が賦与されると考える。 $\tau < 0$  ならば「過去」、 $\tau > 0$  ならば「未来」である。

但しここで断っておきたいのは、筆者は、これらの「文法的意義」がそのまま動詞の時称体系におけるそれぞれの形式の内容をなす、と主張している訳ではない、ということである。言語における時間及び時称の観念は、元よりしかく客観的かつ単純なものではないと考えられる。上述の抽象的な文法的意義と現実の時称の内容との関係については、別に考察の要があるが、ここで論じているのは、偏に「現在」、「過去」等の時称の観念の生ずる基盤についてなのである。

ここから命題  $P$  を過去、現在、未来に投影するオペレーターとして  $\tau$  を考えれば、②は次のようになる。

$$[\lambda(G(a), G(b), \tau(P)), M] \quad \textcircled{3}$$

§9 既に述べたように、 $t = 0$  のときであつても、行為の場と発話の場とは、原則的には一致しない。両者が一致するのは、例えば Я говорю вам русским языком. という

ような比較的稀な場合に限られる。

印欧語に於いて両者の一致を形式的に保証する手段が一般に存在するか否かについては、今の所審かにしない。しかし例えば接続法の使用を背景にしたラテン語の直説法現在形が、両者の一致を示すことはある。例えば、

*Quis negat haec omnia quae videmus deorum potestate administrari?*

「我々が現に見るところの、これらあらゆるものが、神々の力で管理されていることを、誰が否定しようか。」

ここで *videmus* は従属文の中に用いられており、本来ならば接続法になる所である。これが直説法現在であることによって、少なくともこの部分が発話の場に帰属することは、保証されている。

「行為の場」と「発話の場」の同一性を保証する為には、時間の外に場所乃至空間の条件が必要とされようが、少なくとも現在形は、他の時称とは異った位置を持つとすることができる。もしいわゆる歴史的現在がこの二つの場の同一性(乃至は発話の場の欠如)を保証する手段であるとすれば、現在形のみが「歴史的現在」という特殊な用法をもつ理由も、肯首することができる。

§10 ところで話者は、ある行為についてそれが一定の時点において成立することを伝えるとは限らない。行為が成立しないこと、成立の可能性のあること、あるいは成立の不可能なこと、更には行為の成立の期待など、行為に対する話者の態度を伝えようとすることが多い。

このような「様相」 *modality* は、明らかに発話の場に関係している。しかしこれを附加的条件の集合  $M$  に帰属することは難しい。むしろ行為の集合を定義域とする関数と考えるべきであろう。これを仮に  $\mu(P)$  のように表わすことにすれば、「発話の場」表示は、更に次のように修正されることになる。

$$[\lambda(G(a), G(b), \mu \circ \tau(P)), M] \quad ④$$

ここで  $\mu$  に関しても  $\mu \circ \tau(P) = \tau(P)$  となる恒等写像を考えれば、行為  $V$  は「直説法」の意義を持つことになる。もし  $\mu(P) = \sim P$  ならば、これは否定文となる。例えば *Я не бегу.* にみられるように、私の行為は、「走っている」こと以外ならば何でもよい。

ここで否定も様相の一つに含められていることは、注意を要する。様相を直ちに具体的な「法」と等しいとすることができないことを示すものだからである。 $\mu$  の性質とその意味については、別に考察することが必要とされる。

また  $\tau > 0$  (未来) という条件と「様相」との関係は、周知のように極めて密接であると考えられる。これは未来時には行為が未だ存在していないことによって、話者の予測、

期待などが介入して来るからである。このような時称と様相との関係についても、更に研究が深められねばならない。

§11 以上極めて思弁的に「発話の場」の設定ならびにこれと行為の場との関係について考察した。このような考え方の当否は、具体的な言語の実相に即して検証されなくてはならないが、少なくともこのように考えることによって、動詞の語彙的意義と文法的意義を理論的にも截然と区別することを得る。

たとえばスラヴ語のアスペクトは、話者の行為の捉え方、行為に対する評価と関係していると考えられるが、他方たとえば сидеть 「坐っている」、иметь 「もっている」のような状態動詞は不完了体動詞であるというように、「行為の場」にも依存している<sup>8</sup>。この意味においてアスペクトは、語彙的意義との接点に位置する範疇であると言うことができる。従ってアスペクトの研究に際しては、両者の関わり方についての分析が必要とされる。

§12  $\lambda$  によってあらわされる伝達についてみれば、そこにはいくつかの種類が考えられる。J. J. Austin 及びこれを承けた J. R. Ross が、いわゆる performative verbs の存在を考えて行った performative analysis というものも、基本的には同じ発想に基づくものであった<sup>9</sup>。

例えば  $\lambda$  が SAY,  $V$  が go, go の argument を John とするとき、

$$[\text{SAY}(A, B, \text{go}(\text{John})), (\text{John} \in \overline{A \cup B}) \cdot M]$$

は John goes. という平叙文を与える。これに対して例えば  $\lambda$  が ASK ならば疑問文 Does John go? が、BE-SURPRIZED ならば感嘆文 John goes! が、また ORDER ならば命令文 Go! が、それぞれ得られることになる。

このように考えれば、文の種類は  $\lambda$  の種類によって決定されることになるが、これについては、後に少しく立入って考察することにする。ここでは  $\lambda$  を SAY 一種類に限定した方が便利であると考えていることを指摘し、その形を  $\lambda = \text{Я ВМ ГОВОРИЮ}$  という形をもつものとする。  $G(a)$  を Я,  $G'(b)$  を ВМ で代表させるのである。  $\lambda$  をこのようにすることによって、④ は使い易い形にすることができる。即ち

$$[\lambda \circ \mu \circ \tau(P), M] \quad \textcircled{5}$$

更にいわゆる deixis も、当然発話の場との関連において考察されねばならない。例えば this, that は、話者との相対的位置関係によって決定される意義を持つ。言語によっては、例えばラテン語の iste の系列のように、聞き手との相対的位置関係を表わすものも存在している。

<sup>8</sup> 語彙的意義の側面からの予備的考察は「行為の質について」『人文』第26集(1980), pp. 92-115. 参照。

<sup>9</sup> 例えば J. Boyd, J. P. Throne, The semantics of modal verbs, JL, 4, 1968.

冠詞も含めたこれらの dexis については、更に詳しい研究が必要とされよう<sup>10</sup>。

§13 さてこれまで述べた「発話の場」の設定がどのように働くかを検証するために、文の modality について若干考察を進めてみよう。

既に述べたように  $\lambda = (\text{Я ВАМ ГОВОРИЮ})$  とすれば、これは一見トリヴィアルであって、特に  $\lambda$  を一々冠する必要がないかにも見える。しかしこれは実はいわゆる「発話の時点」 момент речи を設定することに外ならないのであって、 $\lambda$  の存在は命題  $P$  を、いわゆる système d'allocation の中に置くことを意味する。これに対して  $\lambda$  の argument でない、独立した  $\mu \circ \tau(P)$  は、いわゆる「物語の体系」 système de narration に  $P$  を置くことになる<sup>11</sup>。

§14  $\tau$  については、(СЛУЧАЕТСЯ)、(СЛУЧИЛОСЬ) あるいは (БУДЕТ СЛУЧАТЬСЯ) の何れかであるとする。またここではアスペクトについてはこれを一切捨象することにする。アスペクトについて未だ充分に考えがまとまっていないからである。

さて既に述べたように  $\mu$  を恒等写像を与えるオペレーターとした時  $\mu(P) = P$  は、直説法を意味すると考える。そうすれば  $P$  を /он пишет письмо/とした時、直説法現在の形は次のようにして得られる。即ち

$$\begin{aligned} & \lambda((\text{Я ВАМ ГОВОРИЮ})(\text{СЛУЧАЕТСЯ})/\text{он пишет письмо}/) \\ & = \text{он пишет письмо.} \end{aligned}$$

同様にして例えば過去の形は、次のようになる。

$$\lambda((\text{СЛУЧИЛОСЬ})/\text{он пишет письмо}/) = \text{он (на-)писал письмо.}$$

またもし  $\lambda(P) = \sim P$  を考えれば、これは否定文を表わす。これを仮に (ОТРИЦАЮ) とすれば、直説法現在の否定文は、例えば次のようになる。

$$\begin{aligned} & \lambda((\text{ОТРИЦАЮ})(\text{СЛУЧАЕТСЯ})/\text{он пишет письмо}/) \\ & = \text{он не пишет письмо.} \end{aligned}$$

§15 ここで  $\lambda$  として (СОМНЕВАЮСЬ) を考えてみる。たとえば

$$\lambda((\text{СОМНЕВАЮСЬ})/\text{он пишет письмо}/)$$

<sup>10</sup> 「超文的単位の設定とその構造をめぐって」『人文』第24集(1978), pp. 24-55. において dexis について若干触れるところがあった。

<sup>11</sup> J. Veyrenc, La syntaxe contradictoire du présent perfectif en russe moderne, *Études sur le verbe russe*, Paris 1980.

これは恐らく疑問文 Он пишет письмо? 若しくは Пишет ли он письмо? を与えるに違いない。

一方 Он не пишет письмо? のような否定疑問文を考えれば、これは上述の行論からして次のようなものとせねばならない。

$$\lambda((\text{СОМНЕВАЮСЬ})(\text{ОТРИЦАЮ})(\text{СЛУЧАЕТСЯ})/\text{он пишет письмо}/)$$

このことから  $\mu$  は単純なもの外、複合したもの、即ち  $\mu = \mu_1 \circ \mu_2 \circ \dots$  のようなものの存在することを許容することが、必要になって来る。そしてその際 (ОТРИЦАЮ) は他の  $\mu_i$  に対して常に従属的な位置に立つことが確かめられる。 $\mu$  にはヒエラルキーが存在するのである。

このことから前節で述べた否定文も、実は単純な  $\mu = (\text{ОТРИЦАЮ})$  を有するのではなく、 $\mu_i$  を恒等関数、 $\mu_2 = (\text{ОТРИЦАЮ})$  とする複合的な様相を有するもの、即ち平叙肯定文に対する平叙否定文であることが判明する。これらのヒエラルキーについては、更に考察の要があると思われる。

§16 次に  $\mu = (\text{УДИВЛЯЮСЬ})$  のようなものを考えてみる。これは感嘆文を与えるに違いない。即ち

$$\lambda((\text{УДИВЛЯЮСЬ})(\text{СЛУЧАЕТСЯ})/\text{он пишет письмо}/)$$

$$= \text{Он пишет письмо!}$$

又もし  $\mu = (\text{ПОВЕЛЕВАЮ})$  とすれば、これに命令文を与える。即ち

$$\lambda((\text{ПОВЕЛЕВАЮ})(\text{БУДЕТ СЛУЧАТЬСЯ})/\text{ты пишешь письмо}/)$$

$$= \text{Пиши (ты) письмо!}$$

しかしこの形は、主語が二人称の場合にしか妥当しない。三人称の場合には例えば次のような図式になってしまうからである。

$$\lambda((\text{ПОВЕЛЕВАЮ})(\text{БУДЕТ СЛУЧАТЬСЯ})/\text{он пишет письмо}/)$$

これを前例に倣って \*он пишет письмо! とするわけにはいかない。話し手が聞き手以外の者に対して命令することが、論理的に不可能だからである。

三人称命令法といわれる пусть あるいは пускай 並びに дай 若しくは давай による文は実は主語を二人称とする命令文であった。即ち

$$\lambda((\text{ПОВЕЛЕВАЮ})(\text{БУДЕТ СЛУЧАТЬСЯ})/\text{тыпустишь (пускаешь)}$$

$$(\text{что}) \text{он пишет письмо}/)$$

$$= \text{Пусть (Пускай он пишет письмо!)}$$

λ((ПОВЕЛЕВАЮ)(БУДЕТ СЛУЧАТЬСЯ)/ты даешь (дашь) (что)  
он пишет письмо/)  
= *Давай (Дай) он пишет письмо!*

これは *пусть, дай* などの語源とよく照応している。

§17 しかしこの図式は、例えば *Бог спаси тебя!* のような文を説明することができない。その原因は恐らく  $\mu$  として (ПОВЕЛЕВАЮ) と想定した為であると思われる。

ここから (ПОВЕЛЕВАЮ) よりも弱いものを命令文の  $\mu$  として想定することが適当であると思われて来る。もし  $\mu$  = (ОЖИДАЮ) とすれば、命題の主語を二人称とする場合にも、また三人称とする場合にも、等しく説明することが可能となる。三人称の場合、例えば、

λ((ОЖИДАЮ)(БУДЕТ СЛУЧАТЬСЯ)/бог спасает тебя)  
= *Бог спаси тебя!*

このような場合、理論として説明力の強いものを探るべきなのは当然であるが、問題は単なる理論的便宜にある訳ではない。現実に機能している  $\mu$  の内容がここで問われているからである。たとえば同じ命令法であっても言語によってその内容は必ずしも同一でないと考えられる。それがどのようなものであるかは、偏えに説明力の強いものを求めるという手続きによって確定することが可能となる。ロシア語の場合、夙に指摘されているように、命令法は印欧語の希求法に遡る (cf. \*eid-oi > иди, \*eid-oi-te > идѣте) が、もし (ПОВЕЛЕВАЮ) よりも (ОЖИДАЮ) の方が説明力が強いとすれば、ロシア語の命令法は、機能的にも未だ希求法に近いということになる。

§18 *пусть(пускай)* と *давай(дай)* のうち *давай (дай)* の方が未だ原義をよく保存していることは、例えば見掛け上の主語が一人称の場合にもこれが使用可能であることから推察できる。たとえば

λ((ОЖИДАЮ)(СЛУЧАТЬСЯ)  
/ты даешь (что) я пишу письмо)  
= *Давай я пишу письмо.*

複数の場合には同様にして *Давай мы пишем письмо.* となり、勸奨を示すとされるが、これも勸奨を表わす一人称複数形が印欧語の希求法に遡ることと並行している (e.g. \*eid-oi-mos > идѣмъ)。

この外命令法には条件又は譲歩をあらわすもの、当為をあらわすものなど、種々の用法がある。たとえば、

(1) Вы-то уедете, а я **оставайся** и за все **отвечай**. (Семенов)

「貴方は行ってしまわれるのに、私はここに留って、すべてのことに責任を持たねばならないのですか。」

(2) **Войди** он сейчас ко мне в комнату, — не шевелюсь. (А. Н. Толстой)

「彼が今私の部屋に入ってきたとしても、私はびくともしません。」

これらは何れも複文であり、これを扱うためにはそれに先立って複文に対応する命題の合成の手続きを確定する必要がある。稿を改めるより外はない。

また不意の行為を表わすとされる、たとえば Он возьми да умри. 「彼は突然死んでしまった」のような用法についても、今後の考察に俟ちたい。

§19 今  $\mu$  として (НАДЕЮСЬ) を考えてみる。これと  $\tau$ =(СЛУЧИЛОСЬ) と組み合わせれば、たとえば次のような図式がえられる。

$$\lambda((НАДЕЮСЬ)(СЛУЧИЛОСЬ)/он пишет письмо/)$$

これは明らかに現実に反する想定を表わしている。してみればこれは例えば条件文の主節に立つ接続法であるに違いない。即ち Он (на-)писал бы письмо. である。

これに対しもし  $\tau$ =(СЛУЧАЕТСЯ) を想定すれば、たとえば次のようになる。

$$\lambda((НАДЕЮСЬ)(СЛУЧАЕТСЯ)/я пишу письмо/)$$

これは現在その行為が行われていないならば、やはり現実に反する想定となるであろう。я писал бы письмо. 「今私は手紙を書いていたであろうに」のような場合である。しかしもし現実に行為が存在しているならば、これは例えばその行為の継続の希望を表明することになるに違いない。たとえば Я сидел бы здесь еще немножко. のような場合である。

更に ты (на-)писал бы письмо. 「君は手紙を書けばよいのに」乃至は「手紙を書きなさい」のような場合には、 $\lambda((НАДЕЮСЬ)(БУДЕТ СЛУЧАТСЯ)/ты пишешь письмо/)$  のような図式が想定される。

これら接続法の全体については、稿を改めて考察する必要がある。ここでは単なる問題の所在の指摘にとどめたい。

§20 先に平叙文の場合  $\mu$  は恒等関数であると考えたが、 $\mu$  がすべての場合に恒等関数でなければならぬということはない。いま  $\mu$ =(ПОКАЗЫВАЮ) 及び  $\mu$ =(УТВЕРЖДАЮ) を考えてみるとする。そうすれば両者共、命題に対する話し手の態度を表わすものであって広義の様相に属していると考えられる。これらを用いれば、例えば次のような図式を得る。

$\lambda((\text{ПОКАЗЫВАЮ})(\text{СЛУЧАЕТСЯ})/\text{он пишет письмо}/)$

= *Вот он пишет письмо.*

$\lambda((\text{УТВЕРЖДАЮ})(\text{СЛУЧАЕТСЯ})/\text{он пишет мисьмо}/)$

= *Ведь он пишет письмо.*

これらは従来平叙文として取扱われているが、様相が参与しているという点で、これとは異っている。強いて言えば前者は「提示文」、後者は「主張文」ということになる。вот, ведь はこのような様相の指標と考えられるのである。

§21 いわゆる反語疑問文の場合は、次のような図式を想定する必要がある。

$\lambda((\text{СОМНЕВАЮ})(\text{УТВЕРЖДАЕШЬ})(\text{СЛУЧАЕТСЯ})$

$/\text{он пишет письмо}/) = \text{Разве он пишет письмо?}$

ここで問題となるものは、(УТВЕРЖДАЕШЬ)の部分である。「発話の場」の定義から  $\mu$  は話し手に関わるものでなければならないからである。筆者はこれを次のような構造を持つものと考えたいと思う。即ち

$[\lambda(G(a), G'(b), \mu \circ \tau(\lambda'(G'(b), G(a), \mu' \circ \tau'(P)), M')), M]$

明らかなように  $\lambda$  は聞き手の話し手への伝達をあらわしている。換言すれば反語疑問は聞き手の話し手への伝達を想定し、その伝達の内容に対する疑問を表明するという構造を持つことになる。もしそうとすれば上述の図式は、より正確には次のような形を持つと考えべきであろう。即ち、

$\lambda((\text{СОМНЕВАЮСЬ})\{\lambda'(\text{УТВЕРЖДАЕШЬ})$

$(\text{СЛУЧАЕТСЯ})/\text{он пишет письмо}/)\}$

これが「反語」疑問文といわれる所以は、まさにこの点に存していると思われる。そしてそのような構造の存在を指示するのが、разве, неужели のような частица の存在なのである。

このような「入れ子」構造は、例えば J. Veyrenc が transposition と称するものに照応していると思われるが<sup>12</sup>、これについても更に詳細な検討が必要である。

以上が粗雑ながら今後の研究の展望である。

<sup>12</sup>J. Veyrenc, L'impératif russe et les système de l'énonciation, op. cit. p. 96.

## РЕЗЮМЕ

## УСТАНОВЛЕНИЯ “ПОЛЯ ВЫСКАЗЫВАНИЯ” И ВИДЫ ПРЕДЛОЖЕНИЯ

До сих пор автор исследует лексические значения глагола и связанные с ними вопросы на основе выдвинутых им гипотез о том, что, с одной стороны, на семантических различиях между частями речи в основном отражаются в познавательной деятельности говорящего, и о том, что специфика глагольного значения состоит в специфическом ему способе показывания и “стилизации” внеязыковой действительности, с другой. (Об этом подробнее см. *Remarks on the Meaning of Russian Verbs, Japanese Slavic and East European Studies*, vol.1, 1980.)

Впрочем, в ходе изучения выяснилось, что это последняя гипотеза является недостаточной для объяснения ряда явлений, принадлежащих к высшему, собственно грамматическому уровню — понадобилось выдвинуть новую рабочую гипотезу, которая была бы совместима с вышеупомянутыми двумя гипотезами.

В качестве такой гипотезы автор предлагает здесь предположения о структуре “поля высказывания”, и вместе с тем пытается наметить перспективы дальнейшего хода исследования на основе этого предложения.